

# 教員の授業改善を促す「間接的な美術館利用」の具現

—浜松市美術館「教員のための仏像講座」を例に—

島口直弥<sup>1</sup> 芳賀正之<sup>2</sup>

1) 浜松市教育委員会・浜松市美術館 2) 静岡大学教育学部

## Embodiment of "indirect use of museums" to encourage teachers to improve their classes

-Hamamatsu City Museum of Art "Buddha Statue Lecture for Teachers" as an example-

Naoya Shimaguchi Masayuki Haga

### Abstract

In this paper, we will formulate a hypothesis regarding the balance of each training category in A~D, the topics covered in the training, and its direction, so that participants will be motivated to improve their classes using Buddha statues and recall specific ways to use them. Then, we will devise and implement training content according to the hypothesis. Next, a voluntary questionnaire survey is conducted to the participants of the training. Based on the descriptions of the questionnaire, we will analyze and verify whether the participants' motivation to improve their classes using Buddha statues increases as a result of this training, and whether they were able to recall specific ways to use Buddha statues in class. On top of that, I would like to identify new issues and consider and propose directions for embodying "indirect use of museums" that encourages teachers to improve their classes.

キーワード：美術館、教育普及、教員研修、授業改善、学習指導要領、教科等横断的な学び、仏像

### 1. はじめに

筆者<sup>1</sup>は、浜松市美術館にて過去5年間実施した教員研修の内容を整理することで、美術館の教員研修について、A「利用方法やプログラム内容を周知する研修」、B「図画工作・美術科の授業づくりに関する研修」、C「展覧会に関する研修—ワークショップ型—」、D「展覧会に関する研修—講義型—」の4つにカテゴリに分類した。<sup>1)</sup>

他館に目を向けると、A「利用方法やプログラム内容を周知する研修」としては、これのみを単独で実施していることが確認できる美術館は限定的だが、愛知県美術館では美術館での鑑賞学習の実践報告が実施され<sup>2)</sup>、浜松市美術館同様、美術館での子供の学びの具体を教員に提示する試みがみられる。B「図画工作・美術科の授業づくりに関する研修」は、国立国際美術館<sup>3)</sup>、長野県立美術館<sup>4)</sup>等、全国の美術館で実施されている他、三重県立美術館のように教育委員会と連携した研修会を実施したり<sup>5)</sup>、愛知県美術館のように鑑賞プログラムの企画・実施し鑑賞学習ツールの開発などを行う研究会を立ち上げたりする例もある<sup>6)</sup>。C「展覧会に関する研修—ワークショップ型—」は、教員対象のワークショップそのものは全国の美術館で実施されているが、埼玉県立近代美術館<sup>7)</sup>や島根県立美術館<sup>8)</sup>のように地元大学と連携し、授業づくりや展覧会(展示作品)に関連するワークショップを開催する例もある。D「展覧会に関する研修—講義型—」は、国立西洋美術館、東京国立近代美術館等、全国の多くの美術

館で展示室における展示解説(ギャラリートーク等)として実施される例が多い。

実施形態(場所・方法等)は様々ではあるが、日本全国の美術館における教員研修は、浜松市美術館同様、概ねA~Dの4つのカテゴリの範疇において実施されているように思われる。

これらの研修を通して、子供たちが美術館を訪れ、実物に触れる「直接的な美術館利用」を目指すのか、美術館側の情報提供や提案で教員の授業改善を促し子供の学びに還元する「間接的な美術館利用」を目指すのかによって、A~Dの各研修カテゴリの色合いの強弱をつけながら、総合的・横断的にカスタマイズすることが必要であると考えられる。(図1)特に予算的、時間的、地理的制約で美術館利用が困難な学校があるのは事実で、「直接的な美術館利用」に加え、「間接的な美術館利用」の考え方を広げ、それを目指す研修の在り方を検討すべきだと考える。<sup>9・10)</sup>

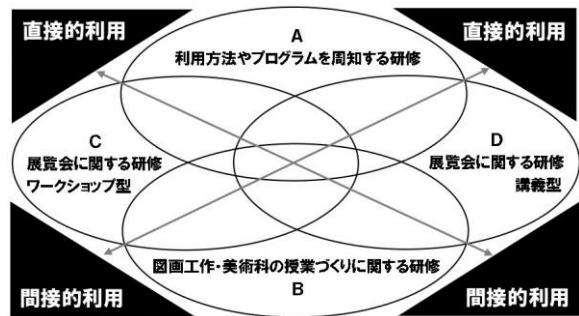


図1 美術館による教員研修のカテゴリと研修で目指す利用形態との関係性(イメージ)(島口、芳賀、2023年)

さて、令和5年11月、筆者が学芸員として勤務する浜松市美術館にて企画展「みほとけのキセキⅡー遠州・三河のしられざる祈りー」（以下「みほとけ展Ⅱ」）に関連する教員研修（以下「本研修」）を主催する運びとなった。<sup>11)</sup>「みほとけ展Ⅱ」に展示される仏像は浜松市と隣接する市に所在する地域伝来の作例で、展覧会終了後、地域の寺院や神社等で鑑賞可能な作例も含まれる。このことから、本研修は参加者が研修後に「みほとけ展Ⅱ」に子供たちを引率する「直接的な美術館利用」よりも、仏像の教育的有用性<sup>12)・13)</sup>を具体的に示し、参加者が今後の授業に仏像を活用することによる授業改善を目指す「間接的な美術館利用」に重点を置きたいと考えた。

本論では、「みほとけ展Ⅱ」に伴う本研修の実施に際し、A～Dの各研修カテゴリーのバランス、研修で取り上げるトピックスやその方向性等について、参加者が仏像を活用した授業改善への意欲を高め、具体的な活用方法を想起することができるように仮説を立てる。そして、仮説に応じた研修内容を考案・実施する。次に、研修の参加者への任意のアンケート調査を行う。アンケートの記述をもとに、本研修の成果として、参加者の仏像を活用した授業改善への意欲の高まりがみられるか、授業における仏像の具体的な活用方法を想起することができたかを分析し、検証する。その上で、新たな課題を見出し、教員の授業改善を促す「間接的な美術館利用」を具現するための方向性を検討・提案したい。

## 2. 研究の仮説と仮説検証のための手立て

本研修は教員の一般的な週休日にあたる土曜部の午前中（午前10時～正午）の2時間で実施した。2時間という時間の制約の中で、A～Dの各研修カテゴリーの全てを十分に網羅することは難しく、軽重をつける必要があると考えた。その上で本研修では、仏像そのものへの興味・関心を高めること、図画工作・美術科をはじめ様々な教科・領域における仏像の活用を、美術館で実施した仏像をテーマにしたプログラムにおける子供の学びの姿で周知することを意識し、主にA「利用方法やプログラム内容を周知する研修」、B「図画工作・美術科の授業づくりに関する研修」、D「展覧会に関する研修ー講義型ー」をもとにした2つの仮説を立てて、研修の実施を試みることにした。

なお、特に言及のないC「展覧会に関する研修ーワークショップ型ー」については、本研修の時間的制約上、十分な実施が難しいと判断したが、A「利用方法やプログラム内容を周知する研修」の「プログラム内容の周知」の部分において、美術館で子供たちを対象に仏像をテーマにして行ったプログラムの様子を、活動する子供たちの写真や動画を用いて具体的に紹介すること、同日午後実施のワークショップ「子どもわくわく仏像鑑賞講座」の自由見学で補いたいと考えた。

## (1) 研究の仮説

### 〈仮説1〉

D「展覧会に関する研修ー講義型ー」に併せ、展示室で仏像の実物を前にした解説を実施し、その造形的な魅力や歴史的・文化的な価値を紹介したり、実物でのみ味わうことが可能な鑑賞体験の機会を提供したりすることで、参加者の仏像に対する興味・関心を高め、授業に仏像を活用しようという意欲を高めることができるだろう。

### 〈仮説2〉

A「利用方法やプログラム内容を周知する研修」として、教育普及プログラムで仏像と対峙した子供たちの反応を紹介したり、B「図画工作・美術科の授業づくりに関する研修」を、他教科・領域の視点を加えて実施したりすることで、参加者が仏像の教育的有用性や様々な教科・領域での子供の学びの姿を想起することができるだろう。

## (2) 仮説検証のための手立て

### 〈手立て1〉

仏像展を開催している美術館を研修の会場とし、筆者が展示室内で仏像の前にギャラリートークを実施する。仏像（神像）の尊格の種類（如来・菩薩・明王・天/神）とその見分け方、各時代の材料、制作方法、様式等の変遷について紹介する。また、仏像の大きさや立体感に起因する迫力や存在感、彫刻や彩色の技術に着目し、彫刻作品としての造形的なよさや美しさを味わわせる。さらに、朽損・剥落箇所から仏像が経た時の経過の長さを実感させたり、地域の仏像の分布や仏教文化圏の特徴を講義で紹介し、仏像の地域における歴史的・文化的意義を感じ取らせたりする。

### 〈手立て2〉

筆者が小・中学生を対象に実施した、仏像を主題とした教育普及プログラムや出前講座について紹介する。重点を置いた教科・領域（図画工作・美術科、社会科、総合的な学習の時間、特別活動）の「見方・考え方」を意識した目標設定、「教科等横断的な学び」の視点から育む資質・能力について確認する。実施した教育普及プログラムや出前講座の活動の展開、視点や仕掛けを紹介し、子供たちの学びの様子について、画像、動画、子供たちの感想文等の記述をもとに具体的に取り上げる。また、必要に応じて、学習指導要領（解説を含む）の記述に言及し、仏像の教育的有用性とその可能性について、根拠を提示する。

### 3. 教員研修の実際

#### (1) 研修名

教員のための仏像講座—地域の仏像の魅力と教材化の可能性—

#### (2) 研修申込人数

浜松市、静岡市、吉田町の幼稚園・小中学校、静岡大学教育学部附属学校に勤務する教員 40 名（表 1）。

表 1 本研修申込者の概要

校種	職名	人数	教員免許（人数）
幼稚園	園長	1	体育（1）
小学校	校長	3	数学（1）社会（2）
	主幹教諭	1	社会（1）
	教諭等	22	国語（2）社会（3） 理科（2）美術（4） 体育（4）音楽（2） ※中高免許無し（4） ※免許回答無し（1）
中学校	教諭等	13	国語（3）社会（4） 理科（1）美術（6） ※複数免許所有（1）

#### (3) 主な研修内容

##### ① ギャラリートーク（図 1）

展示室内において仏像の実物を前にした作品解説を実施した。「みほとけ展Ⅱ」の展示構成に準え、仏像の種類や役割、材料、造像方法や構造等、仏像への興味・関心の高まりが期待できる事柄を選んで紹介した。

- ・ 遠州地域最古の埴仏・塑像
- ・ 神木から造られた神像
- ・ 仏像の構造①（一木造り、割刳造り、寄木造り）
- ・ 仏像の構造②（内刳り、玉眼）
- ・ 壊れても守られる仏像（破損仏）
- ・ 都から伝わった定朝様式の仏像
- ・ 四天王の役割とその姿
- ・ 千手観音の手の数の秘密
- ・ 背中で分かる仏像の秘密
- ・ 大日如来と不動明王の関係



図 1 ギャラリートークの様子

##### ② 遠州地域の仏像・仏教文化圏の解説（図 2）

講座室にて、仏像の分布や時代背景等、展示室での紹介が難しいと判断した事柄について、地図や文字資料等をもとに紹介した。

- ・ 水辺や山岳への仏像の分布とその要因
- ・ 国境への仏像の分布と類似点
- ・ 国分寺や定額寺の影響
- ・ 権力者の存在（荘園領主、在庁官人、地頭等）
- ・ 地形と交通路の関係



図 2 遠州地域の仏像や仏教文化圏の解説

##### ③ 教育普及プログラム・出前講座の紹介

美術館をはじめ、学校や寺院にて実施した仏像をテーマに実施した教育普及プログラムについて、子供たちの活動の様子を写した写真や動画をもとに紹介し、必要に応じて学習指導要領の記述の関連を確認した。

- ・ 地域の仏像の鑑賞と仏像を版に表す活動を接続・一体化した題材構想について（浜松市立蒲小学校 5 年生・図画工作科）（図 3）
- ・ 学区に伝来する仏像を要に、地域のよさや魅力を探究する総合単元の構想について（浜松市立都田小学校 3 年生・図画工作科/社会科/総合的な学習の時間/特別活動）<sup>12)</sup>（図 4）
- ・ 奈良・京都方面への修学旅行を見据え、地域の仏像や都の国宝仏を題材に「中学生のための仏像講座」について（浜松市立八幡中学校〈他 2 校〉 2 年生・美術科/社会科/総合的な学習の時間/特別活動）（図 5）



図 3 子供たちが鑑賞活動の後に版に表した仏像



図4 学区の仏像を美術館来館者に紹介する子供たち



図7 千手観音を様々な角度から鑑賞する子供たち



図5 友達と対話しながら仏像を分類する中学生

#### ④ 「子どもわくわく仏像鑑賞教室」の自由見学

本研修参加者に、同日午後開催のワークショップ「子どもわくわく仏像鑑賞教室」の自由見学を促した。小学校から中学校まで幅広い発達段階の子供たちが様々な視点で仏像に対峙し活動する様子を、本研修参加者に直接見学してもらい、仏像を活用した授業づくりの具体的なイメージを掴むことを目的とした。

- ・ 四天王と同じポーズで「はい、チーズ！」(図6)
- ・ 腕が取れた天王立像のポーズを予想しよう
- ・ 千手観音「どこから見るとグッとくる？」(図7)



図6 四天王立像のポーズを再現する子供たち

#### 4. アンケート結果

本研修実施後に任意で行ったアンケートの回答について、各質問項目の回答を分類・整理し、研修の成果を考察する。

##### (1) アンケート内容(質問項目)

###### <質問1>

ギャラリートーク(展示解説)を聞いて、印象に残ったことを教えてください。

###### <質問2>

遠州地域の仏像や仏教文化圏について、興味をもった点を教えてください。

###### <質問3>

地域の仏像の教育的有用性について、感想をお聞かせください。

###### <質問4>

ご自身が教員として仏像と子供たちを対峙させるとしたら、どうアプローチしますか。

##### (2) 回答方法

自由記述回答方式

##### (3) 回収方法

本研修実施後、参加者にメールにて質問紙データを送付し、2週間以内のメールでの返信にて、回答済の質問紙データ添付を回収した。

##### (4) 回答率

45% (18/40)

##### (5) <質問1>への回答(複数回答可)について

###### ① 回答の概要(表2)

表2 質問1への回答の概要

主な回答 ※一部抜粋、( )は類似内容の回答数	回答数
<b>仏像の材料、構造、制作技法</b> ・玉眼がキラリと光っていてとても印象に残っています。(5) ・一木造りと寄木造りの違いを改めて理解できた。(3) ・節のある木を使った仏像に美術と宗教の両側面が窺えた。(2) ・大陸から入ってきた仏像の作り方がどう変わってきたか。 ・木造の仏像が削り抜かれている理由が分かった。(4) ・仏像の影り直しや塗りなおしが実物を通して分かった。 ・仏像の素材の変化。	17
<b>ギャラリートーク、美術館・学芸員の役割</b> ・解説をしてもらって見て回る方が何倍も楽しかった。(2)	10

・熱量に圧倒され、引き込まれた2時間だった。(3)(※) ・聞き手を引き込む話し方と分かりやすい説明が印象的。 ・美術館は地域の知的コミュニティの場だと認識しました。 ・知的教育活動をプロデュースする学芸員の導きに感動した。 ・担当者のご努力、美術館の思いが感じられた企画でした。 ・美術の話や歴史の話等を行ったり来たりするのがいいです。	
仏像の様式・作風とその変遷 ・安産を願う形の「一日造立仏」という仏像の存在に驚いた。 ・好まれる造形美が変化すること。 ・彫りの深さで造形の大体の時代が分かること。(2) ・時代によって仏像の体つきが違う。 ・時代によって仏像の衣の彫りが違うこと。(2) ・その時代を反映した作風があるということ。(2)	9
展示会のねらいや展示構成の意図 ・時代背景や仏像の特色を対比する展示構成。(2) ・物語のある展示構成。 ・「キセキ」のタイトルにいろいろな意味が込められている。 ・それぞれのコーナーでこだわりをもって配置されている。 ・収集が先か、企画を念頭に足で稼いで仏像を探されたのか。 ・展示の工夫(背面が見られる展示方法)が開けたこと。	7
仏像(神像)の種類やその意味 ・千手観音は40本しか手が無いが、25の世界を教える。(2) ・如来、菩薩、明王、天の見方や知識を得られた。(3) ・神が物に宿るという考え方。 ・仏像だけでなく、神の像があること。	7
仏像の保護、文化財指定 ・仏像の保護は大変であるということ。 ・クラウドファンディングで修復に600万円かかると聞いた。 ・文化財指定されるかされないかという裏話が面白かった。 ・浜松からもっと重要文化財が出るかもとわくわくした。	4
仏像を制作し、守った先人の存在や思い ・昔の人々が仏像を大切にしたいという思い。 ・仏像を制作した人々の思いを想像する見方は新鮮で有意義。 ・ケースのない展示で作者の息遣いが伝わってくるよう。 ・仏師の思いについて慮ることにロマンを感じた。	4
仏像制作の歴史的・文化的背景 ・貴族の時代と武士の時代の仏像が比較できた。(2) ・時代や思想が芸術分野に大きく影響し、特徴に表れている。	3
地域伝来の仏像の存在 ・京都や奈良に行かないといけないと思いついでいたので、地元にも魅力ある仏像があることは新しい発見だった。(3)	3
文化とその伝播 ・都の流行が地方に伝わるのは今も昔も変わらない。 ・身近でも知らない自国文化(仏教美術)について。	2
仏像制作の地理的背景 ・仏像が伝わる寺院が重要な都市や街道沿いに残っている。	1
仏像の見え方の違い ・見る方向によって見え方が違うことは授業でも活用可。	1

## ② 回答の分析・考察

### ア 仏像そのものへの興味・関心の高まり

「仏像の材料、構造、制作技法」に関する回答が17と最も多く、複数回答のあった「玉眼」(回答5)、「一木造りと寄木造り」(回答3)、「内刳り」(回答4)への興味・関心の高まりが窺える。玉眼像の面部にライトを当てて紹介したこと、一木造りから寄木造りの違いを展示構成に準え紹介したこと、刳り抜かれた背面の内部が見られる仏像を前に内刳りの目的を解説したことが、反映されている。また、「大陸から入ってきた仏像の作り方がどう変わってきたか。」「仏像の素材の変化。」のように、材料や造像方法の変化に関する回答も見られ、参加者の仏像の材料、構造、制作技法への興味・関心の高まりが窺える。

さらに「仏像の様式・作風とその変遷」に関する回答が9と、全体の3番目に多い。「彫りの深さで造形の大体の時代が分かること。」「時代によって仏像の衣の彫りが違うこと。」「その時代を反映した作風があるということ。」について、それぞれ複数回答があり、「時代」の変化によって仏像の造形や作風が変わることに、参加者の関心が集まっていることが分かる。「みほとけ展Ⅱ」では、11世紀の一木造り作例から12世紀の定朝様式の作例、13世紀の写実的な作例を時代に沿って展示したフロアがあり、ここで実物を確認しながら時代ごと様式・作風の変遷を紹介したことがこれらの回答に影響を与えたものと考えられる。その他、「仏像(神像)の種類やその意味」に関する回答も7と比較的多く集まる等、仏像そのものへの興味・関心の高まりが窺える回答が複数見られたことは、教員の仏像を活用した授業改善・授業づくりの第1歩といえ、本研修の意義の1つとして重要である。

### イ 美術館の存在意義の確認

「ギャラリートーク、美術館・学芸員の役割」に関する回答が10と全体の2番目を占めることが特筆される。その中でも「熱量に圧倒され、引き込まれた2時間だった。」を含む3回答、「聞き手を引き込む話し方と分かりやすい説明が印象的。」と、伝え方や話し方に関する回答が目立つ(図8)。これは伝え方や話し方へのこだわりを生業とし、日々子供たちに対し、様々な事柄について興味・関心を高めようと授業改善を図っている教員という職業ならではの傾向かもしれない。内容面では「美術の話や歴史の話等を行ったり来たりするのがいいです。」と、美術以外の教員免許所有者が多いことをふまえ、仏像の造形的な側面に加え、歴史的な事象や文化の伝播等の側面を取り上げ、それらを往還する形でトークを進めた点も評価を得た。ギャラリートークは美術館の教育普及活動の要であり、その方法や内容について評価を得たことは、「美術館は地域の知的コミュニティの場だと認識しました。」「知的教育活動をプロデュースする学芸員の導きに感動した。」との回答を含め、美術館という存在の教育的意義を教員に周知するものとして重要である。

仏像の話のことを質問されているのだと思いますが、それ以上に私にとって一番印象に残ったのが、熱い語りです。「仏像ってこんな魅力があるんだぜ!」「美術として鑑賞してもこんなに面白いが、時代背景を知って歴史的に見てもこんなに面白いんだぜ!」という語りの熱が私を惹きつけます。これって、教師が子供に授業をする場合と同じではないでしょうか。いくらその分野に詳しくても、子供に伝わらない場合があります。専門知識や技術をもっていることは大事ですが、加えて大事なものがあると思います。「俺はこれが好きなんだー!!!お前もその世界にちょっと首を突っ込んでみないか?」という熱です。前回展(「みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展」浜松市美術館、2021年)の時にお話を伺ってから、仏像にちょびっと興味をもちました。それまでは仏像に何の興味もありませんでした。仏像を見ても「ふへん」、ただそれだけでした。しかし、前回展以降、それまで見えなかったものがほんの少し見えるようになったのです。本も何冊か読みました。見えなかったものが見え、世界が広がったのです。これって、人生が豊かになったということなんです。ありがとうございます!

図8 回答の概要「ギャラリートーク、美術館・学芸員の役割」(※)の全文

(6) <質問2>への回答(複数回答可)について

①回答の概要(表3)

表3 質問2への回答の概要

主な回答 ※一部抜粋、()は類似内容の回答数	回答数
古様で身近な作例、未知の作例の存在 ・古い時代のもがまだまだ知られずに存在すること。(2) ・小さなお寺さんでも仏像を見せてもらえるとよい。 ・想像していたよりも古い時代の仏像がたくさんあること。(2) ・近在の寺院を、機会を見つけて訪れてみたい。 ・浜松にはまだまだ未調査の仏像があること。 ・近所の仏像があり驚いた。(2) ・地元で仏像が伝わる寺院があるのでいつか調べてほしい。	10
国分寺・定額寺の影響 ・遠江国分寺、磐田が中心であったこと。(8) ・遠江国分寺は国史跡で磐田市も痕跡を残し、努力している。 ・浜松市中心部の竜禪寺、頭陀寺が出てきたことに安堵した。	10
仏像の分布、仏教文化伝播のルート ・分布図からどう点に在していたか、街道との繋がりが見えた。(4) ・浜名湖北部や磐田に多くの仏像が残っていること。 ・仏像の分布から改めて磐周・引佐が貴重な地区と認識した。 ・浜名湖北側のルートの話が出たが、展示を見て理解できた。 ・水域視点、山岳視点からの考察が面白かった。 ・引佐の山地域や海地域に仏像が多く存在している。 ・浜名湖の存在の大きさを感じます。	9
都の流行の伝播の影響 ・都の流行や知恵が遠州地域に伝わり、仏像に反映している。(2) ・都にも引けを取らない仏像が伝わっていること。 ・都との繋がりが地域の人々の関わりが仏教文化圏を育む。	4
地域の政治・文化との関連 ・11~12Cにおける政治、文化、宗教の様相が分かる楽しさ。 ・磐田市には荘園があり、仏像が多く存在する。 ・磐田が政治・宗教の中心であることが仏像を通して分かった。	3
廃仏毀釈や太平洋戦争の影響 ・浜松の中心部の消失してしまう前の仏像の存在。 ・浜松は戦火で貴重な文化財が失われてしまったこと。 ・神仏分離、廃仏毀釈、浜松大空襲の影響が大きいと推察する。	3
仏像の造像方法・造像技術 ・霊木や神木など特別な木をから造像された作例があること。 ・機械のない時代の仏師の精巧緻密な技術に尊敬の念を抱く。	2
仏像を守り伝えた先人の存在 ・地域の人々が災害や人災から仏像を大切に守ってきたこと。	1
本来の安置場所(安置状況・建築) ・保管されている場所や建物、置かれている状態に興味がある。	1

② 回答の分析・考察

ア 地域に伝わる古仏への興味・関心

「古様で身近な作例、未知の作例の存在」に関する回答が10と、他の事柄に関する内容と同率ではあるが最も多く、「近所の仏像があり驚いた。」等、自分たちが暮らす地域に、身近な地域や知っている地域に仏像が伝わることに驚く反応が複数多く見られた。また、「古い時代のもがまだまだ知られずに存在すること。」(回答2)、「想像していたよりも古い時代の仏像がたくさんあること。」(回答2)、伝来する仏像が平安・鎌倉時代にまで遡る古い仏像であることへ関心が向けられた回答も目立った。その上で、「小さなお寺さんでも仏像を見せてもらえるとよい。」「近在の寺院を、機会を見つけて訪れてみたい。」等、地域の寺院を訪れることへの意欲の高まりが伺える回答も確認できた。事象に向き合った際の新たな発見に驚き、既存の知識やイメージを覆す経験から新たな価値や魅力を感じ取ったり創造したりする経験を教員自身が体感することは、教員の授業づくり・授業改善に新たな視座をもたらすものといえ、重要である。

イ 仏教文化の伝播やその背景への関心

「国分寺・定額寺の影響」に関する回答が10で他の事柄に関する回答と同率で最も多かった。特に「遠江国分寺、磐田が中心であったこと。」に関する回答が8と突出している。「みほとけ展Ⅱ」出陳の仏像が伝わる遠州地域の現在の中心は浜松市(人口約80万人)で、浜松市隣接の磐田市(人口約16万人)が古代の遠江国の中心であったことに驚く声が多かった。

「仏像の分布、仏教文化の伝播のルート」に関する回答も9と全体の2番目に多かった。「分布図からどう点に在していたか、街道との繋がりが見えた。」に関する回答が3つ、「仏像の分布から改めて磐周・引佐が貴重な地区と認識した。」「浜名湖北側のルートの話が出たが、展示を見て理解できた。」との回答も見られ、仏像の分布の背景にある仏教文化の伝播のルートや重要な地域について関心が高まった参加者が多かったことが窺える。展示室と講座室でともに実施した仏像の分布図を示しながらの解説の成果が影響を与えているものと推察される。

(7) <質問3>への回答(複数回答可)について

① 回答の概要(表4)

表4 質問3への回答の概要

主な回答 ※一部抜粋、()は類似内容の回答数	回答数
地域を知る・地域への誇り・郷土愛 ・地域の特徴、重要な地域だったことが分かる。 ・自分が生まれ育った地域を大切に思うことができる。(5) ・自分の住んでいる地域を見直す。(3) ・自分の地域への愛着をもつ。(7) ・自分の地域の歴史の深さやすばらしさを学べるのが魅力的。	17
歴史・文化・先人の願いを知る ・脈々と受け継がれた歴史に思いを馳せる。(3) ・地域に根差した文化であることを考えられる。(3) ・どのような願いを込めて作られた仏像なのかを考える。(2) ・都や他の地域とのつながりを知る。 ・先人の思いで地域が成り立っている。歴史を学ぶ意義。(3) ・時代の流れを反映した仏像のつくりで時代の特徴をつかむ。	13
図画工作・美術の鑑賞・表現 ・実物を直接鑑賞することができる。(2) ・紙面や画像から実感しにくい大きさや立体感。 ・鎮座している空間を直接見られる。 ・粘土でオリジナル仏像を作ることも応用できそう。	5
教科等横断的な学び ・仏像は様々な視点、様々な切り口から学ぶことができる教材。 ・教科横断的に地域を知る。 ・総合や図工、社会、国語と関連付けられる。 ・社会科の先生方とのコラボが有効だと思う。 ・横だけでなく縦にもつながることができる。	5
主体的な学び・興味・関心 ・地域の文化財への興味・関心。 ・学区の仏像であれば子供たちの興味・関心をひける。 ・子供たちが主体的に学べる教育資源。 ・クイズや体験を取り入れ、主体的に学ぶ子供が増える。	4
総合的な学習の時間 ・都田小と美術館の総合学習としてのアプローチが興味深い。 ・地域を知る総合学習。 ・ふるさと再発見、郷土への誇りを醸成できる総合学習。	3
新たな視点や疑問、価値への気付き ・身近にあるものを新たな視点や疑問をもって見つめ直す。 ・地域に根付いているものの価値について理解する。	2
音楽科の鑑賞 ・その頃の音楽にふれてみる。	1
特別活動 ・修学旅行へのアプローチとして有効。	1

## ② 回答の分析・考察

### ア 地域教材としての可能性

「地域を知る・地域への誇り・郷土愛」に関する回答が17と最も多かった。「自分が生まれ育った地域を大切に思うことができる。」(回答5)、「自分の住んでいる地域を見直す。(回答3)」、「自分の地域への愛着をもつ。」(回答7)から窺える「自分が生まれ育った地域、暮らしている地域を見直し、地域を大切に思う気持ちや愛着を育むこと」は、「総合的な学習の時間」やそれを核とした教科等横断的な学びにおいて、地域について探究することに直接的に結びつくものである。「総合的な学習の時間」や「教科等横断的な学び」に関連する回答が8あったことから、参加者の教員が仏像の地域教材としての可能性を想起しやすかったのではないかと考えられる。「自分が生まれ育った地域、暮らしている地域を見直し、地域を大切に思う気持ちや愛着を育むこと」は、浜松市を中心とした遠州地域の仏像を展示した「みほとけ展Ⅱ」そのもののコンセプトと重なる部分である。美術館の地域性の濃い展示会と展示作品が、地域教材の開発へつながることを教員に周知できた事例として重要である。

### イ 様々な教科・領域への活用の可能性

「歴史・文化・先人の願いを知る」に関する回答が13と全体の2番目に多かった。「脈々と受け継がれた歴史に思いを馳せる。」(回答3)、「地域に根差した文化であることを考えられる。」(回答3)、「先人の思いで地域が成り立っている。歴史を学ぶ意義。」(回答3)等の回答中の歴史、文化、地域、先人等の言葉から、主に社会科の歴史的分野の学習における仏像の活用をイメージしているものと推察される。

「図画工作・美術の鑑賞・表現」に関する回答数は5で、「教科等横断的な学び」に関する回答と並んで3番目の多さだが、「地域を知る・地域への誇り・郷土愛」、「歴史・文化・先人の願いを知る」に関する回答と比較すると決して多くはない。しかし、その内容に注目すると、「実物を直接鑑賞することができる。」(回答2)、「紙面や画像から実感しにくい大きさや立体感。」「鎮座している空間を直接見られる。」等、立体感や大きさ、空間を感じ取ることができる直接鑑賞の意義を見出す回答が複数あった。また、「粘土でオリジナル仏像を作ることにも応用できそう」という、鑑賞から表現へとつなぐ題材構想を想定した回答があったことは興味深い。本研修では、教育普及活動・出前講座の紹介において、浜松市立蒲小学校における地域の仏像の鑑賞と仏像を版に表す活動を接続・一体化した題材構想の事例を紹介している。この事例紹介が仏像を主題とした鑑賞と表現をつなぐ題材構想へと波及したかは現時点では不明であるが、そうした回答が得られたことは本研修の成果である。

### ウ 「教科等横断的な学び」の可能性

「教科等横断的な学び」を想定した回答数は5で、「図画工作・美術の鑑賞・表現」に関する回答数に並ぶ。これは教育普及プログラム・出前講座の紹介で、浜松市立都田小学校の学区に伝来する仏像を要に地域のよさや魅力を探究する教科等横断的な学びの事例を取り上げたことに起因するものと思われる。回答数は3と多くはないが「総合的な学習の時間」に関する回答に「都田小と美術館の総合学習としてのアプローチが興味深い。」とある他、その他2回答も都田小学校

の事例を想定したと思われる回答内容といえる。

「教科等横断的な学び」の回答のうち、「総合や図工、社会、国語と関連付けられる。」「社会科の先生方とのコラボが有効だと思う。」という回答にあるように、仏像は様々な教科・領域等における教育的有用性を秘める。そして、それらを相互的かつ有機的に関連付けた「教科横断的な学び」を具現することで、それぞれの教科・領域における仏像の教育的有用性がより高まることが期待される。<sup>14)</sup> このことを浜松市立都田小学校における実践例で具体的に提示し、複数の参加者の共鳴が得られたことは、本研修の意義の1つといえる。

### (8) 質問4への回答(複数回答可)について

#### ① 回答の概要(表5)

表5 質問4への回答の概要

主な回答	回答数
<b>図画工作・美術科のアプローチ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仏像がなぜ大事にされているのかを考える。</li> <li>・あなたの中にはどの仏さまがいるのだろう。</li> <li>・影から見つける形の魅力。</li> <li>・仏像ミニチュア、あなたならどこに置く？</li> <li>・仏像のパーツに迫る。</li> <li>・真似することで特徴を見つけ、分類する。</li> <li>・仏像のまわりのオーラや後光、風景等を描く。</li> <li>・資料集の仏像鑑賞に地域の仏像も織り交ぜる。</li> <li>・装飾具や衣装を作り、ファッションショーを開く。</li> <li>・教科書の仏像と遠州の仏像を比較し、似ている点を見つける。</li> <li>・図画工作科の鑑賞教材として。</li> </ul>	11
<b>社会科のアプローチ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・貴族文化、武家文化等、各時代の文化の導入に仏像から入る。</li> <li>・子供に分かりやすい例えで歴史と絡め、様々な角度で見せる。</li> <li>・授業の導入で写真を活用する。</li> <li>・分類や時代ごとの特徴を指導する。</li> <li>・民衆の思いを想像させる(「人としての生き方」を追求する)</li> <li>・いにしえから伝承される本物に触れること。</li> <li>・伝承し守りつないできた人々と交わり思いに触れること。</li> <li>・仏像が作られた国の歴史や思想、宗教に触れる。</li> </ul>	8
<b>算数科のアプローチ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仏像や仏閣の「白銀比」を使った比の学習</li> <li>・その時代によいとされた仏像を類型化してまとめる。</li> <li>・白銀比や黄金比といった比率で数学的アプローチが可能。</li> </ul>	3
<b>国語科のアプローチ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・好きな仏像 POINT を見つけ、伝え合う。アイスブレイキング。</li> </ul>	1
<b>道徳科のアプローチ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文化財運搬、修復等、文化遺産を残し尊ぶ気持ちの醸成。</li> </ul>	1
<b>特別活動からのアプローチ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・修学旅行先の寺院や仏像を調べ、レクチャーする。</li> </ul>	1
<b>教科等横断的な学びのアプローチ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仏像の鑑賞・表現から、仏像制作の時代背景や願いに迫る。</li> </ul>	1
<b>生徒指導・学級経営からのアプローチ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子供に寄り添い会話を楽しみたい。自分の経験を伝えたい。</li> </ul>	1

## ② 回答の分析・考察

### ア 図画工作・美術科における様々な鑑賞

「図画工作・美術科のアプローチ」に関する回答が11と最多であった。ただ単に仏像を見て鑑賞するというものではなく、「真似することで特徴を見つけ、分類する。」「仏像がなぜ大事にされているのかを考える。」「あなたの中にはどの仏さまがいるのだろう。」「仏像ミニチュア、あなたならどこに置く？」等、視点や発問に工夫を加えた提案がなされている。いずれも、仏像に関する専門的な知識によらず、実物と対峙することで思考力・判断力・表現力等

を働かせるアプローチである点も興味深い。「仏像のパーツに迫る。」という回答をした参加者に回答の経緯について追質問をしたところ、「ギャラリートークで割削造りや寄木造り等、複数のパーツを組み合わせる制作技法や像の構造について具体的に紹介があり、各パーツの面白さや美しさがある。」と回答があった。また、「影から見つける形の魅力」という視点については「展示室内でライトアップされて生じた影、ギャラリートークで筆者がライトを照らしながら作品を紹介した際、天井や床に映った影の魅力を知った。影を使った題材の実践経験もあり、結びついた。」と回答があった。さらに、「仏像のまわりのオーラや後光、風景等を描く。」、「装飾具や衣装を作り、ファッションショーを開く。」のように、仏像の鑑賞から表現活動につながるアプローチについて複数提案がなされたことも意義深い。

#### イ 社会科における具体案の提示

「社会科のアプローチ」に関する回答が8あり、「図画工作・美術科のアプローチ」に次いで2番目を占めた。質問3において社会科に関連する内容の回答が多く見られており、仏像の教材化に関して、社会科のアプローチを想起する参加者も比較的多くなった。「貴族文化、武家文化等、各時代の文化の導入に仏像から入る。」という回答をした参加者は質問1（ギャラリートーク〈展示解説〉を聞いて、印象に残ったことを教えてください。）において、「今回の解説では、鎌倉～平安の仏像の彫りの特色と、文化・時代背景という展開が分かりやすかったです。」（表2「仏像の様式・作風とその変遷」『時代によって仏像の衣の彫りが違うこと。』に内包。）と述べており、平安時代から鎌倉時代への仏像の変遷とその背景に関するギャラリートークの成果が表れた一例といえる。また、「民衆の思いを想像させる（「人としての生き方」を追求する）」、「伝承し守りつないできた人々と交わり思いに触れること。」等、仏像を取り巻く人々やその社会の在り方に注目する社会科という教科ならではの回答も2つ確認できた。

#### ウ 複数の教科・領域のアプローチ

回答数の多かった図画工作・美術科、社会科の他、国語科、算数科、道徳科、特別活動の視点からの回答があった。これは、複数の教科の授業を受け持つ小学校教員、美術以外の教員免許所有する教員が多かった本研修ならではの表れといえるかもしれない。

国語科では言語活動に関する内容、算数科では比や資料の整理に関する学習への活用案が出された。道徳科のアプローチとして「文化財運搬、修復等、文化遺産を残し尊ぶ気持ちの醸成」について回答があった。アンケートの記述だけでは断定は難しいが、これは「みほとけ展Ⅱ」に向けて仏像を梱包・運搬の様子を動画編集して館内で放映したこと、展示作品の中に朽損・虫損が進んだ作例や腕や体の一部が亡失した作例が多数あったことに起因するものと推察される。

#### 「教科等横断的な学びのアプローチ」について、

「仏像の鑑賞・表現から、仏像制作の時代背景や願いに迫る。」という、図画工作・美術科から社会科の学習への横断の念頭にした例があげられている。教科等横断的な質問4での回答数はこの1つであるが、質問1～4を通して、仏像と教科等横断的な学びとの結びつきを想起する記述は複数確認することができる。

#### (5) 「子どもわくわく仏像鑑賞教室」の自由見学

本研修実施後、同日に開催した「わくわく子ども仏像鑑賞教室」の自由見学が可能であることを参加者に事前告知した。本研修参加者のうち2名（うち1名はお子さんとともにワークショップに参加）がワークショップの様子を見学した。このうち、お子さんとともにワークショップに参加した本研修参加者は、質問1の回答において「見る方向によって見え方が違うことは授業でも活用可」（表2）と回答している。「千手観音『どこから見るとグッとくる?』（図7）の活動で、子供たちが千手観音立像を様々な角度、距離、高さから鑑賞し、自分の好みの見え方を見つけている様子から、仏像を授業で活用する際のヒントを得ることができたようである。また、この参加者は、ワークショップへのアンケートにおいても、仏像を見る「視点」の重要性について言及している（図8）。

今までは家族や子供と寺院に行っても仏像を深くじっくりと見ることはありませんでした。今回のワークショップで見方（視点）を変えれば、面白い発見があることに気がきました。子供と色々話し合うのも楽しかったです。

図8 ワークショップに参加した本研修参加者のアンケート

また、もう1名の見学者は、アンケートへの回答において、ワークショップの内容に関する具体的言及はなかったが、質問1の回答において「美術館が、市民向け（親子）講座を開くなど、教育的リーダーシップをとっていただける場であることを認識しました。」と回答しており、美術館での教育普及プログラムについてその意義について理解を得たことは評価できる。

#### 5. 仮説の検証

##### (1) 仮説1について

##### ① 成果

本研修は、D「展覧会に関する研修—講義型—」の形態をとりながらも、仏像展を開催している美術館を研修の会場とし、筆者が展示室内で仏像を前にギャラリートークを実施した。アンケート〈質問1〉では、玉眼、一木造りと寄木造り、内刳り等に関する回答が多く、材料や造像方法の変化に関する回答も見られた。これらはいずれもギャラリートークで重点的に紹介した事柄である。また、〈質問2〉では、地域に伝わる古仏に関する回答、仏教文化の伝播やその背景に関する回答がそれぞれ最も多かった。これらの事柄は講座室での講義にて地図や文字資料とともに解説を行っている事柄である。さらに、〈質問2〉では、地域の寺院に出掛けることへの意欲を示す回答が複数あったことから、参加者の仏像に対する興味・関心が高まったことが窺える。これは、本研究において、展示室でのギャラリートークや講座室での講義を通して、仏像の各時代の材料、制作方法、様式等の変遷、地域の仏像の分布、仏教文化圏の特徴、仏像の地域における歴史的・文化的意義等を紹介したことの成果の一端と考えられる。特に展示室内でのギャラリートークが有効な手立てであったことは、〈質問1〉への回答に、美術館の存在意義の1つとしてギャラリートークを評価する声が散見されたことも論拠となる。

参加者は仏像を彫刻作品としてのみ捉えるのではなく、地域、歴史、文化という広い視野で、多面的・多角的に捉えている。この点は様々な教科・領域において教育的有用性を発揮できる可能性を秘める仏像をも



とにした教員研修の成果として評価できる。また、仏像の彫刻作品としての情報（材料、構造、制作技法、様式・作風とその変遷等）、仏像を取り巻く地理的環境、歴史的事象との関連を含んだ仏教文化圏への興味の高まりは、参加者の教員が、仏像について多面的・多角的に知り、それを各教科・領域の授業づくり・授業改善に活用するための第一歩といえ、重要である。

〈質問3〉への回答で、参加者が仏像の教育的有用性について、「地域を知る・地域への誇り・郷土愛」、「歴史・文化・先人の願いを知る」等の視点から見出していることが窺える。また、〈質問4〉への回答で、図画工作・美術科、社会科を中心に、様々な教科・領域から仏像を活動した授業づくりのアプローチを想定している。これらが仏像と対峙する視点に留まらず、具体的な単元計画、発問等にまでを及んでいる点からも、参加者が授業に仏像を活用しようという意欲は高まっているものと考えられる。

## ② 課題

美術館の仏像展は、実物を間近から直接鑑賞することで、大きさや立体感、作品周辺の空間、彫刻痕や彩色等、紙面や画面では確認できない事柄を感じ取ることができる点が魅力の1つである。しかし、アンケートの〈質問1〉、〈質問2〉の回答に目を通すと、仏像を造形的に捉え、そのよさや美しさを純粋に感じ取ったと思われる記述が確認できなかった。参加者の教員が仏像と対峙し、そのよさや美しさに感動したり心動かされたりすることで、「仏像を子供たちにも見せたい」、「仏像の価値や魅力を伝えたい」と考えてもらうことを狙ったものの、この方向からの興味・関心の高まりは確認できなかった。

本研修は、美術館における教員研修であるが、図画工作・美術科以外の教科・領域における美術館利用の可能性を広げるという観点、彫刻作品であり文化財・歴史資料としての側面を併せ持つ仏像という展示作品の特性、参加者に美術以外の教員免許所有者や複数教科の授業を受け持つ小学校教員が多く含まれていたこと等を勘案し、仏像を造形的な視点のみで捉えるのではなく、地域、歴史、文化等広い視野で多面的・多角的に捉えることに重点を置いた。そのため、展示室でのギャラリートーク、講座室での解説とともに、やや説明的になってしまったことは否めない。ここにD「展覧会に関する研修－講義型－」（展示室でのギャラリートーク、講座室での講義を含む。）の限界があるように思われる。

例えば、ギャラリートークの途中で、本研修では時間的制約から重点を置かなかったC「展覧会に関する研修－ワークショップ型－」の要素を盛り込み、1体の仏像について参加者全員で対話型鑑賞を行ったり、子供たちが行う教育普及プログラムの一部を体験したりすることで、純粋に仏像の造形的なよさや美しさに感化された反応が得ることができたのかもしれない。

研修後に「子どもわくわく仏像鑑賞講座」の仏像の対話型鑑賞にお子さんとともに参加した参加者のアンケート〈質問1〉の回答には、「見る方向によって見え方が違うことは授業でも活用可。」（表2『仏像の見え方の違い』）とある。C「展覧会に関する研修－ワークショップ型－」の要素を盛り込むことで、こうした回答をさらに引き出すような鑑賞体験を参加者に

味わわせることができたのかもしれない。対話型鑑賞を含むワークショップ型の研修を取り入れることの効果は他の教員研修の事例にも確認できるが<sup>15)</sup>、D「展覧会に関する研修－講義型－」にC「展覧会に関する研修－ワークショップ型－」の要素をどの程度どのような方法で取り入れるかについて教員研修の目的、内容によって精査する必要があり、今後の課題である。

## (2) 仮説2について

### ① 成果

本研修は、A「利用方法やプログラム内容を周知する研修」のうち仏像を主題とした教育普及プログラムや出前講座を紹介すること、B「図画工作・美術科の授業づくりに関する研修」に他教科・領域の視点を加えることに重点を置いた。

具体的には、地域の仏像の鑑賞と仏像を版に表す活動を接続・一体化した題材構想（浜松市立蒲小学校5年生・図画工作科）や、学区に伝来する仏像を要に、地域のよさや魅力を探究する総合単元の構想（浜松市立都田小学校3年生・図画工作科/社会科/総合的な学習の時間/特別活動）を中心に、プログラムに取り組む子供たちの姿を写真や動画で提示した。

アンケートの〈質問3〉、〈質問4〉の回答では、地域の仏像の教育的有用性について、仏像を美術作品として捉え図画工作・美術科の鑑賞の対象として、具体的な鑑賞の視点や発問の工夫を想定する回答、鑑賞と表現をつなぐ題材構想を提案する回答も複数あった。また、仏像を地域伝来の文化財・歴史資料として捉え、社会科の歴史的文化の学習、総合的な学習の時間における地域に関する探究課題で活用する回答も多かった。そして、他教科・領域を含め、教科等横断的な学びの中に仏像を位置づけることを想定した回答も複数あった。このことから、本研修の参加者が、具体的事例に触れ、仏像の教育的有用性や様々な教科・領域での子供の学びの姿を想起することができたものと捉えられる。加えて、仏像が図画工作・美術科において鑑賞対象としてはもちろん、表現にもつながられる題材になり得ること、社会科等の他教科をも横断することが可能な題材であること、総合的な学習の時間を要し複数の教科・領域と有機的に結びついた総合単元の構想が可能であること等、仏像の多様な教育的有用性を周知できた点も本研修の大きな成果といえる。

### ② 課題

C「展覧会に関する研修－ワークショップ型－」をA「利用方法やプログラム内容を周知する研修」における美術館で子供たちを対象に仏像をテーマに行なったプログラムの紹介で代替えとしたが、参加者の仏像を造形的に捉える視点が希薄であったことから、それでは不十分だったと言わざるを得ない。教員が仏像の造形的なよさや美しさを堪能し、その経験を授業づくり・授業改善につなぐことができるような、体験的なワークショップを考案し、部分的にでも実施する必要がある。加えて、参加者の多岐に渡る気付きや学びについて、参加者同士が対話・交流する場面を設定することでできれば、参加者が自身の考えをさらに広げ深めることができたのではなかろうか。ワークショップ型の研修を考案する際にも、参加者同士の対話を生み、互いの気付きや学びを交流可能な活動の設定に留意することも大切である。

## 6. おわりに

本論で述べた美術館における仏像を主題とした教員研修において、D「展覧会に関する研修－講義型－」を仏像の実物を前に実施し、その造形的な魅力や歴史的・文化的な価値を紹介したり、実物でのみ味わうことが可能な鑑賞体験の機会を提供したりすることで、参加者の仏像に対する興味・関心、授業に仏像を活用しようという意欲を高めることができた。また、A「利用方法やプログラム内容を周知する研修」として、教育普及プログラムで仏像と対峙した子供たちの反応を紹介したり、B「図画工作・美術科の授業づくりに関する研修」を他教科・領域の視点を加えて実施したりすることで、参加者が仏像の教育的有用性や様々な教科・領域での子供の学びの姿を想起することができ、課題や改善すべき点はあるものの、概ね仮説を立証することができ、教員の授業改善を促す「間接的な美術館利用」を具現できたものと考えられる。

さて、本研修の実施とその検証を終えた今、再度構成図「美術館による教員研修のカテゴリーと研修で目指す利用形態との関係性（イメージ）島口、芳賀、2023年」（図1）について振り返ってみたい。

「間接的な美術館利用」具現するためには、研修の対象となる作品・テーマ、研修の目的によって、A～Dの各研修カテゴリーのバランスのカスタマイズし、展示作品や展覧会テーマに応じた手立てを講じる必要がある。本研修では、A「利用方法やプログラム内容を周知する研修」、B「図画工作・美術科の授業づくりに関する研修」、D「展覧会に関する研修－講義型－」に重点を置き、C「展覧会に関する研修－ワークショップ型－」は、A「利用方法やプログラム内容を周知する研修」におけるプログラム内容の周知によって代替えすることをねらった。この組み合わせとバランスで実施した研修により、参加者が仏像に対する興味・関心、授業に仏像を活用しようという意欲を高め、仏像の教育的有用性や様々な教科・領域での子供の学びの姿を想起することで「間接的な美術館利用」が具現できたこと見れば、今回のA～Dの各研修カテゴリーに関する判断は妥当であったといえる。しかし、C「展覧会に関する研修－ワークショップ型－」のA「利用方法やプログラム内容を周知する研修」におけるプログラム内容の周知による代替えが参加者の仏像を造形的に捉える視点の希薄さにつながった側面を加味すれば、十分に妥当であったとは言いがたい。つまり、軽重はありつつも、構成図の示すように、A～Dの各研修カテゴリーを過不足なく取り入れることが妥当であり理想的といえよう。

ただし、これはそれを成し遂げるだけの十分な条件が整っている場合に限られ、実際には、本研修のように各カテゴリーの取捨選択に迫られることが想定される。その際に「最適解」の研修をカスタマイズするためには、A～Dの各研修カテゴリーの様々な組み合わせや軽重の付け方のさらなる検討を要する。例えば、カテゴリーAとカテゴリーCのように2つのカテゴリーを重視した組み合わせ、A+B+Cを重視した本研修同様の3つのカテゴリーの組み合わせ等を試行し、その成果と課題の検証が必要といえる。そして、どの組み合わせや軽重の付け方が、教員の授業改善を促す「間接的な美術館利用」を具現により近づくかを、構成図（図1）の再構成も含め、検討を継続していく。

## [註]

- 1) 島口直弥・芳賀正之「学校団体の多様な美術館利用を促す教員研修の在り方ー『直接的・間接的な美術館利用』の提案ー」『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第55号』静岡大学大学院教育学領域、2023年、pp.62-74
- 2) 愛知県美術館 HP「先生のためのプログラム 小・中・高の先生方との鑑賞学習交流」  
<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/education/teacher.html>  
(令和5年11月30日現在)
- 3) 国立国際美術館 HP「先生のためのプログラム 先生の研修会」  
[https://www.nmao.go.jp/learning/school\\_program/teacher\\_program/](https://www.nmao.go.jp/learning/school_program/teacher_program/)  
(令和5年11月30日現在)
- 4) 長野県立美術館 HP「先生向けプログラム ティーチャーズ・デイ」  
<https://nagano.art.museum/instructor>  
(令和5年11月30日現在)
- 5) 三重県立美術館 HP「スクールプログラム 教員を対象とした研修 これまでの研修等」  
<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/56253039321.htm>  
(令和5年11月30日現在)
- 6) 前掲 HP（愛知県美術館・令和5年11月30日現在）
- 7) 埼玉県立近代美術館 HP「教員美術講座 先生の学びのために」  
<https://pref.spec.ed.jp/momas/%E6%95%99%E5%93%A1%E7%BE%8E%E8%A1%93%E8%AC%9B%E5%BA%A7>  
(令和5年11月30日現在)
- 8) 島根県立美術館 HP「教員研修」  
<https://shimane-art-museum.jp/visit/school.html>  
(令和5年11月30日現在)
- 9) 図1は『浜松市美術館における教員研修（5年間）』をもとに考察されたものであるが、他館（数館）の傾向から考察すると『美術館における教員研修』の構成図としても汎用性があるものと考えられる。しかし、現考察では調査対象が数館に留まっているため、今後、様々な館の事例をもとに再検討する必要がある。
- 10) 前掲論文1（島口、芳賀、2023年）
- 11) 勅使河原君江・京谷晃男は、「社会教育機関である美術館等が独自に自主的研修機会を提供できる状況となっている。美術館は教育基本法、社会教育法、博物館法により社会教育のための機関として規定され、学校とはその設立趣旨が異なるからこそ教育センター等の学校教育に関連する施設とは異なる独自の取り組みを行うことができるだろう。」「探求心を根付かせる教員研修プログラムの提供が課題とされており、行政研修のようなトップダウン式ではなく、教員が主体的に取り組む自主的研修はますます重要であると言える。」と指摘している。（「地域的美術館等における教員研修の意義と課題-神戸・阪神間美術館・博物館連携プログラム「先生のためのミュージアム活用術」の取り組みから-」『美術教育学研究 第

- 49号』大学美術教育会、2017年 pp. 241-248)
- 12) 島口直弥・芳賀正之「美術館における地域の仏像を取り上げた教育普及プログラム—美術館と学校の連携を軸とした『教科等横断的な学び』の可能性—」『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇』、静岡大学大学院教育学領域、2022年、pp. 146-159
  - 13) 有田洋子は、美術作品の様式のキャッチフレーズ化による鑑賞教育方法を提案している。有田は、様式キャッチフレーズによる仏像鑑賞授業を、小学校中学校の全学年段階で実践し、様式のご受理解と楽しさの両面で、その教育的有効性を実証されている。このアプローチを、仏像を主題とした教員研修に取り入れることで、参加者が仏像をより造形的な視点で捉え、図画工作・美術科での仏像の活用について考えるきっかけとなったかもしれない。（「日本美術の諸様式を言語化して理解させる鑑賞教育方法（2）—SD法による仏像様式感情の全学年調査結果とその考察—」『美術教育学 35』、美術科教育学会、2014年、pp. 45-59
  - 14) 島口直弥「巻末提言 地域伝来の仏像の教育資源としての有用性 —林慶寺の大日如来坐像と都田小学校の子供たち—」『浜松市美術館企画展「みほとけのキセキⅡ—遠州・三河のしられざる祈り—」展覧会図録』、浜松市美術館、2023年、pp. 102-109
  - 15) 青木善治は、研修指導者と経験年数や学校の異なる教師グループで子どもの描いた作品で対話型鑑賞を通して子どもの絵の見方に関する研修会を実施し、教員研修の中に対話型鑑賞を取り入れることで、自分一人では自分の見方や枠組みを外して、新たな見方をつくり出すこと、多様な見方や感じ方や意味を培っていくことが可能になること等、対話型鑑賞による研修会の可能性と有効性を指摘している。（「教師が変容する研修の在り方に関する—考察—対話型鑑賞研修会における教師の変容事例から—」『美術教育学研究 第51号』大学美術教育学会、2019年、pp. 1-8